

昨日から3学期が始まった。26日間に及ぶ長い冬休みから急に学校生活に戻るには、それ相応のエネルギーが必要である。

生徒の皆さんは、家を出て学校へ到着するまでの間に、家での自分「私」から、生徒「公」へ変身「変心」しなければならない。「公と私」「集団と個」という言葉は、「権利と義務」のように、常に対になって考えなければならない。自分を大切にすることや個性を尊重するということは、あくまでも「公」や「集団」という関係の中で主張すべきものである。

生徒の中には、家でのそのままの自分でよいのだと勘違いし、その延長線上で登校してくる人がいるかもしれない。心のスイッチが切り替わっていないわけだから、学校のきまりやルールは、束縛と受け止めてしまうかもしれない。それでは先生方の指導を受け入れようとする姿勢が持てるわけがない。「私」である生徒たちは、家を出たら、学校の道すがら、一步一步、生徒「公」に変身「変心」する努力が必要とされる。

第3学期始業式の中で、本校の生徒指導部長である長澤先生は、生徒に「準備は大丈夫？」と問いかけていた。準備には心の準備や勉強の準備などいろいろある。しっかり切り替えて始めるようにとの話だった。

式では、校長の話として、以下のことをした。

昔、こんな高校2年生がいました。その生徒は新しい年を迎えて考えました。「このままではまずいなあ」と。まもなく高校3年生になるにあたって、自分の高校生活に、自分の人生に大きな不安を感じたわけです。そこでどうしたか。とりあえず3学期の間だけでも自分の生活を変えてみようと考えました。それまでは家では全く勉強しなかったのを毎日30分は机に向かうようにしました。部活動も何となく参加していたのを目標を決めて取り組むようにしました。アルバイトでも、今までよりも元気よくあいさつをするようにしました。すると、自分が思っている以上にいろいろなことがうまくいくようになったそうです。1年とか半年とか長い期間ではなくて、3ヶ月という短い期間だからよかったのだと思いますとその生徒は話してくれました。

3学期に学校に来るのは、1年生と2年生が40日間、3年生は卒業式を入れてもたったの16日間です。みなさん一人一人今年目標や誓いがあると思いますが、まずは3月までにやることを決めて取り組んでみてはどうでしょうか。3月まで一人一人が生き生きと梁川高校での学校生活を送ってくれることを期待しています。

3学期の初日に生徒がどのくらい「校長の話」を聞いてくれるのかと思っていたが、結果は全員が聞いていた。表情が目が違っていった。4月の頃とは全く別の集団であるかのようである。何がよかったのか分析してみた。「昔、こんな高校2年生がいました」のあとに意識して間をおいた。そして、いつもよりもかなりゆっくりと話した。「。」では必ず間をおいた。変えたのはそのくらいである。同じ内容でも生徒にとって身近な同じ高校生の話をもってきたこともよかったのかもしれない。年が改まったということもある。分析結果の最終結論は、生徒が変わったのではなく、話している校長である私が変わったのだと気づかされた。

生徒は一人一人「今年～」という目標や誓いをもっている。ものごとにはポイントとタイミングがある。きっとタイミングがよかったのである。同じ話でもタイミングがずれると、心に届かない、響かないことがある。「校長の話」をあれだけ真剣に聞くのだから、梁川高校の生徒は、ちゃんと「変身」「変心」して3学期初日に臨んだのである。令和2年、今年は期待できそうである。